

## ひでさか 日出坂の夫婦岩 (日出坂)

むかしむかし、日出坂村に人がうらやむほど仲のよい若い夫婦が住んでおりました。

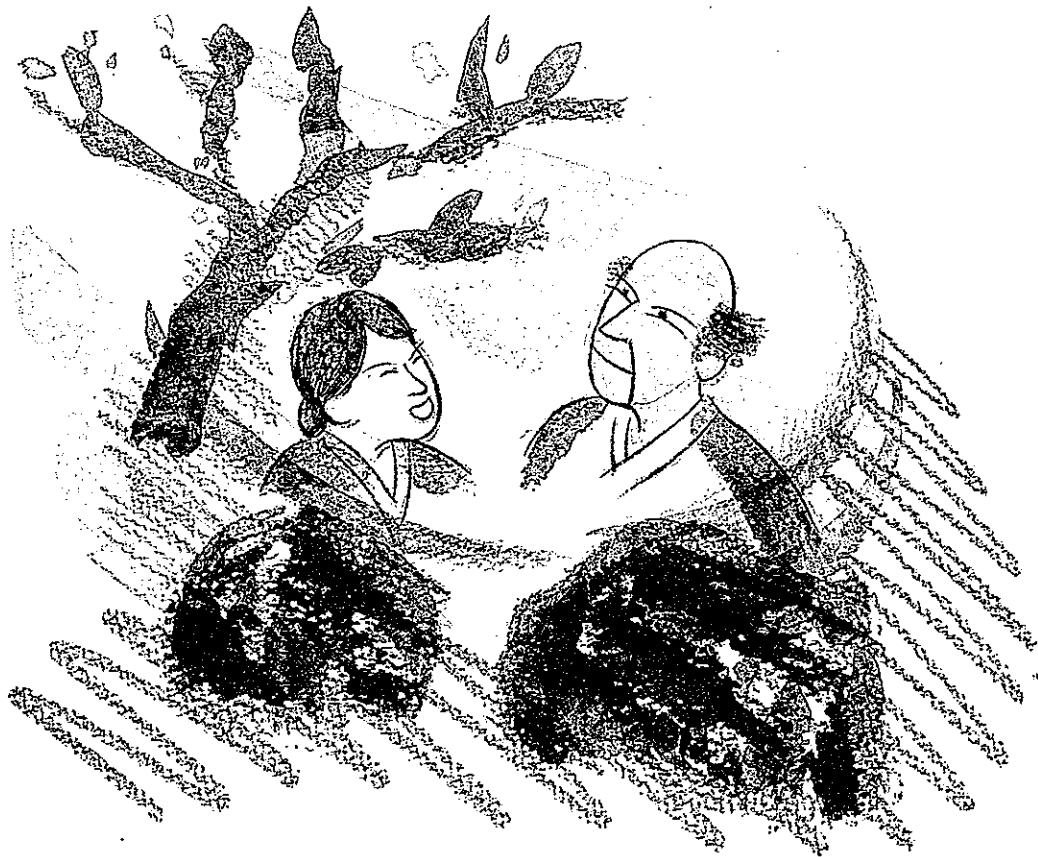
夫婦の生活は貧しく、決して楽ではありませんでした。でも、とても幸せに暮らしておりました。働き者の夫と、やさしい妻でした。

ある年の秋、大きな台風がやってきて、大雨を降らせました。三日三晩降りつづいた雨は、四日目によく止んだのです。

この大雨のせいで、日出坂村を流れる川ははんらんし、村が水でつかってしまいました。夫婦の小さな田んぼも水につかり、この年は大切な米がほとんど取れなかったそうです。

食べるものと言えば、米粒がわずかしか入っていないおかげと少しの漬けものだけでした。こんな貧しい生活の中でも、夫婦はいつも笑顔で暮らしておりました。

その年の冬は、雪のよく降る寒い日が続き、ますます暮らしは苦しくなりました。



そんなある日、村人が妻にたずねました。

「村中食べものがなく、こんなに寒いのに、どうしていつも幸せそうに笑っているの。」

すると、妻は、

「私たち夫婦は、どんな時もいっしょなの。お互いの気持ちがいっしょにあると思うと、それだけであたたかく、幸せな気持ちになるの。それで十分な。二人でいつも、あなたが死んだら私も死ぬって話しているのよ。」

と、こともなげに言いました。

このことは村中の評判となり、いい夫婦のお手本として、うらやましがられるようになっていきました。

そして、この夫婦の姿は何年経っても変わることはありませんでした。それこそ、年を重ねるごとにさらに絆は深くなつていったのです。二人の姿は比翼の鳥ひよくのように、また、連理の枝れんりのようでした。

二人は年を取り、共に白髪の老夫婦となりました。「いっつもいっしょ」と語っていたように、つづいて息を引き取りました。

やがて、二人の姿は二つの岩となり、二人の絆をいつま

でもいつまでも結んでいるのです。

人々はいっしょか、この岩を「夫婦岩」と呼ぶようになりました。そして、「夫婦がお互い幸せになりますように」と願いをこめて「夫婦岩」の前で手を合わせる人が増えていったそうです。

そこで、村人たちは「夫婦岩」を男女の縁結びえんむすの神様として仰あおぎ、まつるようになりました。

日出坂村に伝えられている『日出坂小唄』には、このお話しが歌いこまれています。

日出坂の夫婦の岩のお恵みを受けて

我ら二人の暮らし 楽しや

※比翼の鳥：伝説上の鳥で、雌雄一目・一翼で、常に一体となつて飛ぶ鳥のことで、男女の深い契りのたとえに使われます。

※連理の枝：一本の木の幹や枝が他の木の幹や枝と連なっていること。「比翼の鳥」と対で、夫婦・男女の深いつながりのことを表わしています。